



日本文学全集 43



井上靖

猟銃 天平の薨他



河出書房

日本文学全集 43 井 上 靖



© 1974

責任編集

武者小路実篤 川 端 康 成
石坂洋次郎 山 本 健 吉
瀬 沼 茂 樹

昭和44年5月20日 初版発行

昭和49年5月20日 5版発行

著 者 井 上 靖
発 行 者 中 島 隆 之
印 刷 者 和 田 彰 三
装 幀 原 弘

印 刷・東洋印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292)大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします

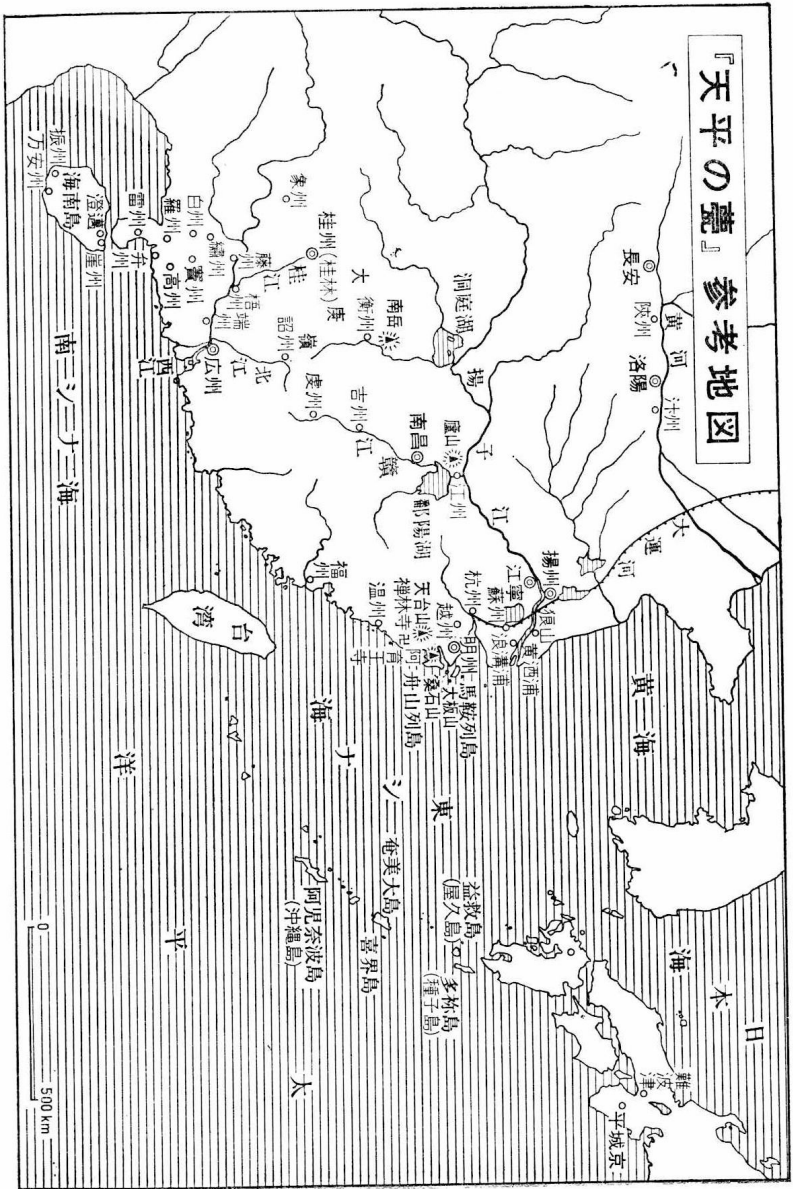
定価はカバー・帯にあります

目次

天平の薨	三
楼蘭	一〇五
洪水	二五
補陀落渡海記	一七
獵銃	一七
闘牛	三三
通夜の客	二七
ある偽作家の生涯	三三
姨捨	三四七
詩集『北国』抄	三六三
年譜	三七三
文学入門	佐伯彰 一八一
作家の横顔	井上佳子 二九一

天平の薨

『天平の薈』参考地図



一章

朝廷で第九次遣唐使発遣のことが議せられたのは聖武天皇の天平四年で、その年の八月十七日に、從四位上多治比広成が大使に、從五位下中臣名代が副使に任命され、そのほか大使、副使と共に遣唐使の四官と称ばれている判官、録事が選出された。判官は秦朝元以下四名、録事も四名である。そして翌九月には近江、丹波、播磨、安芸の四力国に使節が派せられ、それぞれ一艘ずつの大船の建造が命じられた。

大使多治比広成は文武朝の左大臣嶋の第五子で、兄の県守は養老年間に遣唐押使として渡唐している。広成は下野守、迎新羅使の左副將軍、越前守等を歴任して、こんど新たに渡唐大使の大任を帯びたわけであった。副使の中臣名代は鎌足の弟垂目の孫で、島麻呂の子である。

この年のうちに、遣唐使の主要人員は決定され、正式の任命をみた。知乗船事、訳語、主神、医師、陰陽師、画師、新羅訳語、奄美訳語、卜部等の随員を初めとし

て、都匠、船工、鍛工、水手長、音声長、音声生、雅使、玉生、鑄生、細工生、船匠等の規定の乗組員から水手、射手の下級船員まで総員五百八十余名。

ただこの遣唐使派遣の最も重要な意味をなす留学生、留学僧の銓衡だけは、年内には決らないで翌年に持ち越された。もともと時の政府が莫大な費用をかけ、多くの人命の危険をも顧みず、遣唐使を派遣するということの目的は、主として宗教的、文化的なものであって、政治的意図というものは、若しあったとしても問題にするに足らない微少なものであった。大陸や朝鮮半島の諸国の変遷興亡は、その時々々に於て、いろいろな形でこの小さい島国をも揺すぶって来ていたが、それよりこの時期の日本が自らに課していた最も大きい問題は、近代国家成立への急ぎであった。中大兄皇子に依つて律令国家としての第一歩を踏み出してからまだ九十年、仏教が伝来してから百八十年、政治も文化も強く大陸の影響を受けてはいたが、何もかもまだ混沌として固まっていらず、やっと外枠が出来ただけの状態で、先進国唐から吸収しなければならぬものは多かった。人間の成長で言えば少年から青年への移行期であり、季節で言えばどこかに微かに春の近い気配は漂っているが、まだまだ大気の冷たい三月の初めといったところであらうか。

平城京はその経営に着手されてから二十三年、唐都長

安を模したという南北各九条、東西各四坊の整然たる街衢は一応完成はしていたが、都の周辺には夥しい流民が屯し、興福寺、大安寺、元興寺、薬師寺、葛城寺、紀寺を初めとして四十余寺が建立されていたが、壮大な伽藍には空疎なものが漂い、経堂の中の經典の数も少なかった。

年が改まると、全国から選ばれた精進齋の僧侶九人が、こんどの渡唐の成功を祈るために、香椎宮、宗像神社、阿蘇神社、国分寺、神宮寺等送到られ、五畿七道に於ては海神の怒りを和らげるための海竜王経が誦誦され、伊勢神宮を初めとする畿内七道諸社には奉幣使が派遣された。

大安寺の僧普照、興福寺の僧栄叡とに、思いがけず留学僧として渡唐する話を持ち出されたのは、二月の初めであった。二人は突然、当時仏教界で最も勢力を持っていると言われていた元興寺の僧隆尊の許に呼び出されて、渡唐する意志の有無を訊ねられた。普照も栄叡も、隆尊と親しく言葉を交えたのはこの時が初めてであった。二人とも隆尊の華嚴の講義を聞いたことはあったが、平生は傍へも近寄れぬ相手であった。

栄叡は体が大柄で、いつも固い感じのごつごつした体を少し折り曲げて猫背にしており、顔には不精髯を生やしていることが多く、一見すると四十歳近くに見えた

が、まだ三十歳を過ぎたばかりであった。普照の方は栄叡よりずっと小柄で、貧弱な体を持ち、年齢も二つ程若かった。

栄叡は隆尊の話の聞くと、直ぐ、よし行つてやるといった不遜とても解されそうな態度で応諾したが、普照の方は返事をするまでに多少時間がかかった。普照は隆尊の顔を覗き込むようにして、一体唐へ渡つて何を学んだらいいのかと訊ねた。普照らしい質問であった。何も生命を賭けてまでして唐土を踏まなくても、勉強はどこでもできる筈である。自分は今までにそれをして来ている。そのように、普照のひどく冷たい印象を人に与える二つの小さい眼は語っていた。これまで若手の秀才と言え、いつも普照の名が挙げられて来たが、秀才という言葉を普照は軽蔑していた。自分はただ殆ど一日中机から離れないでいるだけだと思った。

二人の全く型の異なつた若い僧侶に、隆尊は持前のおだやかな口調で説明した。日本ではまだ戒律が具わっていない。適当な伝戒の師を請じて、日本に戒律を施行したいと思つてゐる。しかし、伝戒の師を招くと一口に言つても、それは何年かの歳月を要する仕事である。招ぶなら学徳すぐれた人物を招ばなければならないし、そうした人物に渡日を承諾させることは容易なことではあるまい。しかし、次の遣唐使が迎いに行くまでには十五、

六年の歳月がある。その間には二人の力でそれが果せるだろう。

普照は伝戒の師を請ずるのにそれだけの長い歳月が必要だという隆尊の言葉に驚かされたが、伝戒の師の選択には、それだけこちらにも具わったものができていなければならぬであろうし、またこちらで白羽の矢を立てた人物の招聘を実現するには、人と人との関係も何かとものを言ってくるであろう。そうした立場を作るためにはどうしても十数年の唐土の生活が必要になって来る。

そのようなことを隆尊は言っているのであるうと思つた。この時、普照が入唐（にゅうたう）の話承諾する気になつたのは、十数年という長期にわたる唐土の生活が許されるということであつた。もつと短期の還学僧としての入唐なら、そのために一つしかない生命を賭ける気にはならなかつたが、それほど長期の入唐なら、一か八かの危険を冒して遣唐船に乗り込むことも強（あきら）ち悪いことではないと思われた。

隆尊の許を辞した二人は、早春の陽が散っている興福寺の境内で語り合つた。栄叡はさすがに多少昂奮している様子で、いつもより少し早口に喋つた。彼はこんどことは知太政官事（とら）舎人親王と隆尊とが相談の結果持ち上がった話に違ひないと見ていた。

課役を免れるために百姓は争つて出家し、流亡してい

た。ここ何十年間かそうした社会現象を食いとめるために、幾十かの法律が次々に出されていたが、効果は一向にあがつていなかった。問題は百姓ばかりではなかつた。僧尼の行儀の墮落もまた甚（おとろ）だしく、為政者の悩みの種になつていた。僧尼令二十七条という僧尼の身分資格を規定した法令も出ているが、実際にはそんなものは無力であつた。仏教に帰入した者の守るべき規範は何一つ定まっていず、比丘（びく）および比丘尼（びくに）の受けるべき具足戒（ぐそくかい）は三師七証（さんししちしう）（戒場に参会する十人の師僧）の不足で行われていない。目下のところでは仏徒は自誓受戒するか、三聚淨戒（さんじゆじやうかい）を受ける程度で放埒（はうちやう）に流れ次第である。これらの仏徒を取締るのは、まず唐より傑れた戒師を迎えて、正式の授戒制度を布くことである。人為的な法律は無力であり、仏徒が信奉する釈迦の至上命令を以てこれに臨むほかはなかつた。正しい戒儀を整えることが、現在の日本の仏教界で一番必要なことは誰の眼にも明らかなことであつた。こんどの遣唐使派遣の機に、二人の青年僧を渡唐させようとする舎人親王や隆尊の意図もここにあるわけであつた。

「少なくともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの価値はあるようだな」

栄叡は言つたが、普照の方は黙っていた。いつも、自分自身のことしか彼は頭の中になかつた。戒師を招ぶこ

とがどのような意味を持つかということにはあまり興味はなかった。それより十五、六年間に自分が学び得る經典の量の方が遙かに重要な問題であった。その經典の重さが普照には実際に感じられるような気がした。そしてそのことが普照の冷たい眼を多少いつもとは違った憑かれたようなものにしていった。

榮叡は美濃の人、氏族詳かならず、興福寺に住す。機捷神叡にして論望当り難し、瑜伽唯識を業となす。

——渡唐前の榮叡については、『延暦僧録』に依つて、これだけのことを知るだけである。同じように渡唐前の普照については、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だったとも言われていたという甚だ頼りない一事だけが、われわれに残されている。しかし、それでも普照の方は、『続日本紀』に「丙午、授正六位上白猪与呂志女從五位下、入唐学問僧普照之母也」という一条があつて、彼の出生の一端におぼろげながら一つの照明が当てられている。即ち普照の母は白猪氏で、名は与呂志女、天平神護二年（西紀七六六年）二月八日に、正六位上から從五位下を賜わっている。白猪氏の祖は百済の王辰爾の甥であり、その一族には外国関係のことに携わった者が多いことが知られている。

大使広成が拜朝して節刀を受けたのは閏三月二十六日

であつた。節刀は帰国後返還するもので、これを受けることは、準備がここに全く成つて、今や渡唐大使として全權を委任されたということの意味し、それと同時に日和さえなければ待ったなしで解纜しなければならぬ立場に置かれることでもあつた。

これに先立つて、三月一日に広成は山上憶良を訪ねている。憶良は曾て大宝二年の第七次の遣唐使の一行に少録として参加しており、渡唐の経験者でもあり、広成の兄とも親しかつたので、広成はそんな関係で挨拶に出向いたのであらう。憶良は三月三日広成に歌一首と反歌二首を贈っている。

神代より 言ひ伝てけらく そらみつ 大和の国は
皇神の いくしき国 言魂の 幸はふ国と 語
りつぎ 言ひつがひけり 今の世の 人も悉 目の
前に 見たり知りたり 人さばに 満ちてはあれど
も 高光る 日の朝廷に 神ながら めでの盛りに
天の下 申し給ひし 家の子と 撰び給ひて 大
み言 戴き持ちて もろこしの 遠き境に 遣され
罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神づまり
うしはきいます 諸の 大み神達 船のへに みち
引きまをし 天地の 大み神達 大和の 大國魂
ひさかたの 天のみ空ゆ 天がけり 見渡し給ひ
事終り帰らむ日は また更に 大み神達 船のへ

に み手うち掛けて 墨繩すみなはをはへたる如く あち
 かをし 値嘉ちかのさきより 大伴おほともの 御津みづの浜はびに
 ただ泊とどにみ船は泊とどてむ 恙つつが無く 幸さいくいまして
 早帰はやかへりませ

大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早帰はやかへりま
 せ

難波津なはつにみ船泊ふねとどてぬと聞え来こば紐解ひもときさけて立ちば
 しりせむ

反歌のあとの方は、夫の留守を守る広成の室に送った
 ものであった。

四月二日早曉、広成等は憶良の歌にある難波津へ向け
 て、奈良の都を發った。一行の大部分はすでに出航地難
 波津に集まっていた、この日奈良から發ったものは広成
 等騎馬の一団三十名ばかりであった。普照、栄叡等もこ
 の一団の中に居た。寺々からは海路平安を祈念する鐘が
 鳴り響いていて、春ではあったが、桜の蕾はまだ固く、
 曉の風は真冬の冷たさを持っていた。

道は大和平野を突切つて、真直ぐに北西へ伸びてい
 る。一行は王子を経て竜田山を越え、この日は国府で泊
 り、翌日国府を發つて、午少し前に難波の旧都へはいっ

た。ここは九年前の神亀じんき元年から離宮の修營工事が始め
 られ、それが未だに引き続いて行われていて、ところど
 ころに廷臣たちの邸宅が新しく造築されつつあった。春
 の光が白つぽく幾つかの工事に散っている地帯を抜け
 ると、やがて商舗の立ち並ぶ繁華地区へはいった。一行
 は幾つかの橋を渡った。そして最後の橋を渡った時、急
 に潮の香を含んだ風が真向いから吹きつけて来るのを感じ
 じた。このあたりから左手の丘の中腹に難波館が見え、
 この方は建物の朱と青の色が鮮やかだが、続いて新羅
 館、高麗館、百濟館くだらといった今は名前ばかりの古い建物
 が見え始め、その丘の尽きる前方には蘆が一面に生い茂
 った港の一部が望まれた。

間もなく一行は港にはいった。曾て三韓との交通華や
 かだった当時の殷賑いんぎんさは偲おもぶべくもないが、それでも蘆
 の間からは、林のように立ち並んでいる何百という帆柱
 が見えた。港といっても、ここはもとと何本かの川の
 河口が一緒になった外海への出口で、潮と真水とがぶつ
 かり合っている広い水域には、夥しい数の大小の島や洲
 が散らばり、そこに密生している蘆は一見港湾全部を埋
 めているように見えていた。ここに出入する船は、その
 蘆の生い茂っている島や洲の間を通るわけだが、船着場
 の方から見ていると、蘆の間を滑なめつて来るものとしか見
 えない。蘆の間には点々と沢山の潯標みづぶし（水路標の杓くわ）が

立っており、その何本かには小さい鳥がとまっていた。その鳥の白さが、今日ここから遠く異境に旅立って行く人々の眼に滲みた。

船着場には異変が起きていた。切岸にはかなりの距離を措いて四艘の大船が繋かれ、見送人や見物人がその辺りに集め合っていた。船着場の入口には縄張りがあり、見送りの家族の者だけがその内部へはいることを許されている。縄張りの中だけでも二千人程の人間が居るであろうか。女の多いのが目立っている。老婆も、若い女も、子供もいる。縄張りの外の見物人はもう少し多く、こちらには流人や乞食の姿も混じっている。時折、読経とのりとの声がその船着場の混乱と騒擾の中から、急に大きく盛り上がっては聞えて来ていた。

旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天の鶴群。——という万葉集の巻の九の歌は、この時の遣唐船に一人子を送り込んだ母の歌である。もう一つ巻八に竺朝臣金村がこの日の入唐使に贈った歌が載っている。波の上ゆ見ゆる小島の雲がくりあな息づかし相別れなば。——しかし、これは夫を送る妻の歌で、竺金村が知人のために代作してやったものであろう。

大使広成等三十人の、昨朝都を発って来た一団は、船着場の一角で公私の見送人たちとの挨拶をすませると、こんどはそれぞれ違った船に乗って旅立つ自分たちだけ

で互いに水盃をした。

四艘の船は、いずれも長さ十五丈、幅一丈余の大船で、百三、四十人の乗員ならそう窮屈ではなく収容できる大ききだったが、造った国が違うだけに、少しずつ形が異なっていた。大使広成の乗る第一船は船の中央部が相当に広くなっており、副使中臣名代の乗る第二船はそれに較べるとずっと狭かった。それから船中に設けられてある屋形の恰好もその位置も異なっていた。判官の乗り込む第三、第四の船は、これらの船だけが殆ど舷側をつけるように繋留されてあったが、船尾の形はまるで違っていた。第三船のそれは竜のおとし子さながらに大きく反り曲っていて、第四船よりも一間程高かった。

乗組員の誰にも、自分の乗る船が他よりいいか悪いかは判断できなかった。これはこれらの船の建造を受け持った造船使長官にも次官にも判らなかったし、直接木材を刻んだ近江、丹波、播磨、安芸の四か国の船大工たちにも見当がつかなかった。ただどの船も帆柱だけは船の中央部に付けられてあった。百済船の様式をとったもので、帆柱が船の中央部より外れたところにある唐の船とは違っていた。日本の船大工たちは漠然と昔から関係の深かった百済の船の方に信用を持っていたのであった。

夕方、四艘の大船は潮の満ちて来るのを待って難波津の波止場を離れた。岸を離れると、見送りの人々の眼に

は、船はどれもそのまま蘆の間に傾き沈んでしまひはしないかと思われる程重たげに見えた。どの船もそれぞれ百五十人近い人間と、それらの食糧と、滞在費に充てる物資と、衣料、医薬、雜貨の類と、それから唐の朝廷へ献ずる莫大な貢物とを満載していた。見物人のどよめきは船が岸を離れる時だけで、あとは船着場は寧ろひっそりとした表情を取った。四艘の船が全く港湾を出るには一刻ほどの時間がかかった。

四月三日難波津を発航した四船は武庫、大輪田泊、魚住泊、韓泊、櫻生泊、多麻の浦、神島、備後長井浦、安芸風速浦、長門浦、周防国麻里布浦、熊毛浦、豊前分間浦等の内海の港々に、あるいは寄港し、あるいは碇泊して、その月の中頃に筑紫の大津浦に到着した。そしてこの本土に於ける最後の港で、四艘の船は順風を待つために何日かを過した。

そして愈々、広成の一行が大津浦を発航して外海へ乗り出したのは、節刀を受けてから約一月経った四月の終りであった。

大津浦から唐に渡るには二つの航路があった。天智天皇の第五次遣唐船まではいつもここから唐岐対馬に向い、更に南朝鮮の西海岸に沿って北上し、渤海湾口を横断、山東の萊州か登州のいずれかに上陸して、それから陸

路を南下して洛陽より長安にはいつていた。しかし、これは南朝鮮が日本の勢力範囲にあつて初めてその安全が保証される航路で、新羅が半島を統一してからは、否応なしにほかの航路に依らなければならなくなつていた。第六次以後の三回はいつも大津浦を発つと西航して、唐岐海峡を過ぎ、肥前値嘉島に出て、そこから信風を得ていつきに支那海を横断、揚子江を中心とする揚州、蘇州の間のどこかへ漂着するという方法が採られていた。勿論広成らの場合もこの航路に依らうとしていた。

普照と榮叡の乗り込んだ船は、判官秦朝元の第三船であつた。同じこの船にもう二人の留学僧が乗つていた。一人は名を戒融、一人は玄朗と言つた。戒融は一人だけ発航当日に大津浦から乗り込んで来た筑紫の僧侶で、普照と同年配であつたが、大柄な体のどこかに傲慢なものをつけていた。玄朗の方は二つ三つ若かつた。玄朗は紀州の僧で、ここ一年程大安寺に来ていたということだったが、普照も榮叡もこの若い僧にこれまで会つたこともなく、またその名を聞いたこともなかつた。容貌も整つていて、どこことなく育ちのよさがその言動の中に感じられた。

船は筑紫の大津浦を出た最初の夜から、特に海上が荒れていたわけではなかつたが、外海の大きい波浪に弄ばれて、木の葉のように揺れ動いた。船員を除いた

殆ど全部の乗員がみな食物も喉を通らなくなり、ぐったりと死んだように横たわった。そしてそうした状態がその夜から何日も続いた。その中で普照だけは例外だった。初めの二日は人並みに苦しんだが、三日目には頭の痛みも胸のむかつきも取れ、正坐して船のかなり大きい動揺にも平気で身を任せていることができた。しかし、他の三人の留学僧たちが、自分の傍で船暈に苦しんでいるのを朝から晩まで見ていることは、普照にとっても気持ちのいいことではなかった。

中でも栄叡が一番ひどく傷めつけられていた。いつも口を半開きにして、そこから苦しそうな小さい呻き声を吐きづめに吐いていた。栄叡の眉の濃い眼の鋭い顔は、またたく間に憔悴して、正面から眼を当てるのも気の毒な程だった。玄朗の方は死んだようになって、物も言わなければ体も動かさなかった。

ある日、海上に夕闇が漂い始めようとする時刻であったが、普照は、ふいに一番向うの席に横たわっている戒融から声をかけられた。

「何を考えている？」

これが、何となく不逞不逞しい面構えと大入道のような感じの風貌を持った同僚からの、面と向って話しかけられた最初の言葉らしい言葉であった。乗船した時、姓名と生国を名乗り合っただけで、あとはお互いにお互い

に量に取りつかれて、それぞれ孤独な闘いの中に身を置いていたので、言葉を交わすような機会もないままに今まで過ぎていた。

普照は、仰向けに身を投げ出して眼玉だけこちらに向けている筑紫出身の僧の方に、

「何も考えていない」

と答えた。普照には初対面の時からこの大入道が、留学僧に選ばれる程の何ものかを持っている人物とは思えなかった。いかにも筑紫あたりの僧侶でも持ちそうな垢ぬけのしないものをその風姿に付けているのが感じられた。

「俺は考えとる」

戒融は言った。

「何を考えているのだ」

「人間の苦しみというものは、結局は自分自身しか解らないということだな。そしてそれは自分が自分で処理するしか仕方がないものだ。それよりほかにどうすることもできないものだということだな。俺はいま苦しんでいる。俺ばかりではない。栄叡も玄朗もみな苦しんでいる。しかし、お前はいま苦しんでいない。運のいいことに苦しみから脱け出してしまっている」

なんと厭なことを言う奴だろうと、普照は思った。言われた通り普照はいま自分が、きびしく考えれば、誰の

苦しみにも同情していいことを思った。気の毒には思っているが、それをどうしようもないし、どうしてやろうという気持もなかった。それにしてもそれを指摘されることは愉快なことではなかった。すると、そういう普照の心を見透してでもいるように戒融は語を継いだ。

「氣を悪くするな。俺はただ本当のことを言っただけだ。俺とお前の立場が変わってれば、俺もまたお前と同じだ。人間とはそういうものだ」

そして戒融は、必ずしも普照に見せつけるためではなかったろうが、いきなり腹這いになると、もう一物もはいていない胃の中から何ものかを吐瀉とげしようとした。そして、ああ、苦しい、と口に出して言った。

普照は玄朗という年若い僧侶とは、それでも時々口をきくことがあった。大抵船が烈しく揺れ始めた時だった。玄朗は自分の方からいつも口をきった。いかにも何か喋っていることで氣を紛らせでもしているかのよう、に、喋り出すと、その口調には一種の訴えともひとり言ともつかない、弱々しいが、しかし、妙に熱っぽい調子があった。

「なに、これしき大丈夫だ。もう少しの辛抱だ。これで船が難破さえしなければ唐土へ着けるのだ。噂にきいている長安の都も、洛陽の都も見られる。そこを歩き、そこで物を考えることができる。大慈恩寺も、安国寺も、

西明寺も、この眼で見ることができるとだ。そのどこかの寺で俺は学ぶことになるだろう。知るべきことはいっぱいある。読まなければならぬものも山程ある。何もかもこの眼で見、この耳で聞く。広い唐土の全部から俺は吸収すべきものは吸収してしまふ。もう少しだ。もう少しの辛抱だ」

聞いていると、次第にその持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た。しかし、確かにその言葉は、誰もが胸の奥に懐いている素朴なものに触れていた。ただそれは他の者の場合、確しかとは判らないが、何となく口に出すのを憚はばられるようなものであった。そんな時玄朗の顔は真蒼まそうだった。玄朗の喋るのを、いつも誰も取りあわないうで聞いていた。勝手に喋らせておけといったところがあった。

しかし、一度だけ戒融が聞きとがめて、そんな玄朗の言葉を遮ったことがあった。

「余り夢みたいなのを言うな。船が無事に着くかどうかはまだ判っていないんだぞ」

止めを刺すような言い方だった。そんな時でも、榮叡の方は聞いているのかいないのか、終始黙って、眼を空間の一点に当てたままで、相変らず大きい息を口から吐き続けていた。

一同にとつてまさに地獄の苦しみというべき船量か

ら、しかし、順々に脱け出すことができた。普照は別として、玄朗、戒融、栄叡と年の若い方から二、三日ずつの間隔を置いて解放されて行った。船量が収まると、熱っぽい唐土への憧憬を口走っていた玄朗の口は重くなり、一日中黙していることも珍しくなかった。一種説明し難い憂鬱がこの育ちのいい面差を持った青年僧を捉え始めていた。戒融は怠け癖がついたのか、船量が癒つても寝てばかりいた。栄叡は一日中と言ってもいい程法華經を誦していた。普照はそんな同僚たちを時折横眼で睨みながら、この航海中にあげてしまおうと思っている『四分律行事鈔』の第七巻を片時も膝の上から離さないでいた。

この四人の学問僧の乗っていた第三船は、大使広成の第一船に続いて航行しており、すぐあとには第四船が続いていた。副使中臣名代の第二船は殿の筈であった。筑紫を出てから二十日ばかりの間は、前を行く第一船も、後の第四船も、かなり遠距離ではあったが、ずっとその船影を認めることが出来た。夜になると互いに何回となく燈火で連絡し合った。僚船の灯は、いつもお互いの間を埋めている波のためにある規則正しきで明滅して見えた。

二十一日目の夜、海上には深い霧が立ちこめ、そのため船は航行が困難となり、碇を降ろして一時停止することになった。その夜を最後として、以後第一船も第四船もその船影を認めることができなくなった。この頃から乗員には水三合、糲一合が一日の食糧として配給されることになった。

三十日目ぐらいから海水は濃い藍青色を呈し、油のような粘りを持った大きな波浪がゆったりと襲って来ては、船を山から谷へ、谷から山へと運んだ。船は進んでいるのか、後退しているのか、船員以外の者にはちよつと見当がつかなかった。海の色が藍青になってから逆風が吹く日が多くなり、その度に船は碇を降ろし、漂流することを避けて一日でも二日でも順風が来るまで、そこにそうしていた。

四十何日目に初めて烈しい暴風雨に見舞われた。それまでも何回か小さい暴風雨には襲われていたが、その時のような大きいのは初めてであった。暴風雨は午頃始まり翌日の午まで続いた。一時は海水が滝のように船内に落ちて来た。

その暴風雨の夜、普照は闇の中から戒融の声を聞いた。波と風の音の中からその声は聞えて来た。誰へ話しかけたのか、それだけの言葉では判らなかったが、普照はそれが自分に向けられたものであることを感じた。

「いま、何を考えておる？」
戒融の声はそう言った。